HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	書評：「巨大銀行の消失」鈴木恒男著
Author(s)	濱田, 康行
Citation	週刊金融財政事情, 60(9), 64-64
Issue Date	2009-03-02
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/38105
Type	article
File Information	hamada-1.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

書評：「巨大銀行の消失」鈴木恒男著

濱田　康行

北海道拓殖銀行や日本長期信用銀行が破綻した、あの金融危機から既に 10 年余。つまり、そろそろ“時効”だから当時を振り返った書物はかなりの数になるが、頭取という地位にあった人が自ら著したのは本書の一冊のみだろう。

数々の主要ポストを経験はしたものの頭取になるはずのない著者が最後のそれになってしまう。在任はわずか二か月あまり。退職後は、退職金もなくなるどころか、民事の被告人にされ 8 年間におよぶ訴訟生活を強いられる。

モノ書きのプロでない人が一冊の書物を書きあげるのは大変だ。苦しい登山にも似たこの仕事を著者に敢えてやらせたのは使命感。当時の事情は、報道され一般に知られているのとは相当違うようだ。それを書き残し後世に伝える。内容への反論もあろう。また、地位で知り得たビジネス界の事情は“向こう岸”まで持っていくという日本の“しきたり”も著者は気にしたに違いない。しかし、昨今の世界金融危機の展開、つまり不幸が繰り返されるのを見て河を渡る決断をしたのだろう。

本書には未聞の“事実”がぎっしりと詰まっている。昔のウィスキーの宣伝文句ではないが、感情を抑え事実以外“何も足さず何も引かない”という真面目に生きた金融マンの姿勢が読み取れる。

長銀が躓いたのは、長期信用という看板のビジネスがなくなりかけた時に、next をしっかりつかめなかったことによる。これは存在を問われている様々な組織に通じる教訓だ。本書の第 5 章は文学的表現をすれば“白眉”。最終章は最近の事態への著者の提言でもある。でもこれは、じっくり別の一冊にしてもらいたい。本書が“最後”ではないのだから。